

聖書：コリント人への手紙第一 3：1～9

説教題：成長させてくださる神

日時：2022年2月20日（朝拝）

前の2章後半で、クリスチャンの信仰生活はただ御霊の働きに負っていることが言われました。そこに御霊が与えてくださる3つの祝福が語られました。一つ目は神の知恵を私たちに悟らせることです。この世の知恵が蔑むキリストの十字架にこそ、人間の判断の裏をかくようにして罪人の救いを成し遂げる神の驚くべき知恵があることを悟るように、私たちの心の目を開いてくださる。二つ目は御霊は私たちに語らせる霊であるということです。私たちの心の目を開き、感動させ、御霊に教えられたままのことばで御霊のこと・神の世界のことを語るように導く。この世が誇る知恵や雄弁術からしたら愚かで幼稚だと判断されるかもしれませんが、神はその私たちの言葉を用いてご自身のわざを進められます。そして三つ目はキリストの心を持つように私たちに導くことです。御霊はキリストを証しする霊です。御霊は私たちにキリストの素晴らしさを見させ、私たちがキリストに倣い、キリストと同じ心で他者に仕えるように導きます。

さてこのように御霊の働きが語られた後、今日の3章1節でコリント人たちは御霊に属する人のようではない！と言われます。1節：「兄弟たち。私はあなたがたに、御霊に属する人に対するようには語りことができずに、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように語りました。」これはコリント宣教の時を振り返った言葉です。パウロは何を言っているのでしょうか。コリント人たちは救われていないと言っているのでしょうか。そうではありません。1節の初めで「兄弟たち」と呼びかけていますから、パウロは彼らをクリスチャンとして認めています。従って御霊の導きの下にある人たちです。しかしその姿や振る舞いはそうではない人たちのようだ！と言っているわけです。むしろ肉に属する人のようであると。肉に属する人のようだとは、簡単に言えば信仰を持っていない人のようだということです。生まれながらの状態で、かつて神を知らず、自己中心に生きていた時の人のようだ！と。そして彼が決して彼らをクリスチャンではないと見ているわけではないことは、続く「キリストにある幼子」という言葉からも分かります。彼らはキリストにあります。ですからクリスチャンであるというのはその通りです。この表現はコリント人たちにとって衝撃的だったと思います。彼らは、これまで見て来た通り、自分たちは知識や知恵を持っていると高ぶ

っていました。2章6節に出て来た「成熟した人たち」という言葉は、彼らが自分たちに当てはめて使っていた言葉だろうということを前に申し上げました。彼らは自分たちはレベルの高い成熟した人間、また霊的な人たちであると自負していました。ところがパウロは3章1節で「御霊に属する人」のようではない、すなわち霊的な人ではないと言います。さらに「幼子」と言います。成熟した人の反対です。

2節でパウロは「私はあなたがたには乳を飲ませ、固い食物を与えませんでした。」と言います。この「乳」とか「固い食物」とは何のことでしょう。乳は赤ちゃんが栄養を取るためのものですが、成長すれば固い食物を食べ、そこから十分な栄養を取るようになります。ですからこの固い食物とは成熟した大人のための食べ物を意味します。そしてそれは先ほど触れた2章6節から「神の知恵」を指すことが分かります。2章6節でパウロは「しかし私たちは、成熟した人たちの間では知恵を語ります」と言い、この知恵とは十字架につけられたキリストを中心とする福音を指すことが述べられていました。ではもう一方の乳とは何でしょうか。これは信仰に入ったばかりのコリント人にパウロが与えたものを指します。パウロがコリント宣教時に何を語ったかについて、後の15章3～5節にこうあります。「私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、また、ケファに現れ、それから十二弟子に現れたことです。」この後も言葉は続きますが、ここにその内容はキリストの十字架・葬り・復活など、福音の中心的事柄であったことが書かれています。ですから「乳」も「固い食物」も内容は同じと言えます。どちらも中心にあるのはキリストの十字架の福音です。逆から言えば、これ以外にパウロが伝えたり、与えたりするものはありません。ただパウロはコリント滞在時、コリント人たちが信仰に入った後も、初歩的な人々に語るようにして語ったと言っているわけです。入信したばかりの人向けの話をし続けた。固い食物はより深い内容を持ちます。キリストの十字架を基礎とする神の知恵は、パウロが「ああ、神の知恵と知識の富は、何と深いことでしょう」と讚嘆したように、どこまでも広く、深く、高いものです。そういう話に入って行くことは当時の彼らにはまだ無理であった。それはある意味で当然です。最初から完全な人はいません。

しかしパウロがここで問題にしているのは、2節後半にある通り、「実は、今でもま

だ無理なのです」ということです。あれから年月が経たこの時になっても、まだ無理。成長してそろそろ固い食物も咀嚼できる状態に変わっていなければならないのに、まだそれができないと。これはどういうことでしょうか。おそらくパウロがこう言ったのは、コリント人たちがパウロの宣教を振り返って、彼が我々に伝えたのは乳のようなものでしかなかったと馬鹿にしていたからだと思われます。幼稚な、レベルの低い話でしかなかったと。そして彼らは、我々は今や高級な人間になって来たと言って、この世においても恥じることの無い知恵を取り入れ、この世の知識・雄弁術を誇り、巧みに議論できる自分たちを誇っていました。そんな彼らにパウロは、あなたがたは全然成長していないと言っているのです。キリストにはあるが、幼子のままであると。

そして3節で「まだ肉の人だからです」と言います。その証拠として「あなたがたの間にはねたみや争いがある」と言います。4節にある通り、「ある人は『私はパウロにつく』と言い、別の人は『私はアポロに』と言っている」と。1章12節には「私はケファにつく」とか「私はキリストに」と言っている人たちもいたことが記されていますが、ここではそのことを前提にしているので、代表として二人のことだけが述べられているのでしょう。コリント人たちは自分たちの間で働いたリーダーについて議論し、自分たちの好みに合わせて、あっちが優れている、いやこっちが優れている、と言って争っていました。あるリーダーを良いと思うことは自然なことであり、そのこと自体は問題ありませんが、彼らの問題は、4章6節で述べられる通り、「一方にくみし、他方に反対して思い上がって」いたことでした。自分が好むリーダーを持ち上げて、そうでない人をこき下ろす。そしてこっちが良くて、あっちがダメと論じることに、まさに自分の知恵や知識を披露し、自己主張することができます。そして自分と異なる考えを持つ人たちと争い、議論に勝つことによって、自分をより勝る信仰者、レベルの高い信仰者とすることができます。こうして彼らは互いに妬み、ライバル意識を持ち、争っていました。

しかしパウロはその姿は、あなたがたがただの人として歩んでいることを示すものではないかと言います。ただの人間・この世の人・肉の人。決して御霊の人の姿ではないと言っているわけです。パウロは彼らをクリスチャンとして認めてはいます。「まだ」肉の人だからですという言い方は、今後成長する可能性を見て取ってはいます。そんなコリント人たちにパウロは、ただの人の状態、肉の人の状態から脱却せよ！と言っているのです。自分たちが誤った方向に進んで成熟したと勘違いしていること、

実際はただの人と何ら変わらない歩み方をしていることに気づき、方向転換するように。十字架の福音のさらなる理解に進み、固い食物も味わえる成熟した人・御霊の人として歩むように！と諭しているわけです。

そしてパウロは、働き人たちについてはどう考えるべきかを 5 節以降で語ります。彼はそこで「アポロとは何なのでしょう。パウロとは何なのでしょう。」と問います。これは「私はパウロにつく」、また「私はアポロに」と争っていたコリント教会の現状を踏まえた問いです。コリント教会に行くと、その信者たちがいつも語っていたのはこのことばかりでした。それを受けてパウロは「アポロとは何か」「パウロとは何か」と言います。そして「あなたがたが信じるために用いられた奉仕者」に過ぎないと言います。単なるしもべ、神の道具。それぞれ主に与えられた仕事をしただけである、と。そして 6 節で農業のイメージで語ります。「私が植えて、アポロが水を注ぎました。」確かにコリントで福音の種蒔きをした人、開拓伝道をしたのはパウロでした。そしてその後でその地にやって来て水を注ぐ働きをした人、教育的働きをしたのはアポロでした。しかし種を植えて、水を注げば、それで実が実るわけではありません。農業においても蒔かれた種がいのちを發揮して根付くのは蒔いた人の力にはよりません。それはただ神のみわざです。神が種を守り、実を結ぶことへ向かうあらゆるプロセスを導かれます。水も然りです。人が水を注いだら後は自動的に実が結ばれるものではありません。注がれた水を用いて水分を届け、周りの土壌を通して種に栄養が行くように事を導くのは神です。神が一つ一つのプロセス全てに働いて初めて事が進行します。ここで意味深いことは「パウロが植えて、アポロが水を注いだ」という部分の二つの動詞は原文のギリシャ語では不定過去と呼ばれる過去のある特定の時になされた 1 回限りの動作を表す時制で書かれているのに対して、「成長させた」という神の働きに関する動詞は未完了形という継続した動作を表す時制で語られていることです。確かにパウロやアポロの働きは、ある特定の時の 1 回限りの行為です。彼らはそのことをしました。しかし神は継続的に働かれます。実を結ぶことに向かって絶えず働き続けておられたのは神なのです！ですから 7 節で「大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です」と言われます。飢える者や水を注ぐ者は何でもない！Nothing である！という書き方が原文ではされています。もちろん彼らの働きに意味はあります。しかし神に比べたら何ほどのこともない。成長させてくださる神こそ大切です。その方に目を向けないで、ちょっと植えた人、またちょっと 1 回ばかり水を注いだ人を持ち上げて、どっちが勝るか、私はパウロにつく、

あるいはアポロにつく、などと言っているのは全くの見当違いであるとパウロは言っているわけです。そうではなく、神にこそ思いを向けよ！神こそが養い、育ててくださっている方である。その神こそを誇れ！人に多くを帰すな！ということです。

8 節に「植える者と水を注ぐ者は一つ」とあります。コリント人たちは、我々はパウロ派だとか、アポロ派だと言って、そこに対立構造を作っていましたが、勝手に党首に仕立てられた当の本人たちは互いに一つでした。この手紙の 16 章 12 節からもそのことが伺えます。彼らはそれぞれ神に与えられた働きをしています。彼らは同じチームに属し、9 節にある通り、同労者です。神は色々なバラエティーに富む働き人をご自身の働きのために遣わします。しかしその違いに注目して、勝手にそこに優劣をつけ、争いのネタにしていたのはコリント人たちでした。しかもこの世の価値観に立って。8 節後半に、彼らは「それぞれ自分の労苦に応じて自分の報酬を受ける」とあります。大切な点は「労苦に応じて」とあることです。この世の目を見てどれだけ成功したか、数字的結果によってではありません。そしてもっと大事な点は、それを判断するのは主であるということです。コリント人たちが判断するのではありません。コリント人たちは得意になって、自分たちが判断を下し、またそのために議論できる自分たちを誇っていました。しかし評価・判断するのは彼らのすることではない。それをするのは主です。そのことは次回見る 10 節以降、あるいは 4 章 1～5 節でより詳しく述べられます。

最後 9 節は印象的な表現で締めくくられます。原文では「神の」という言葉が、ここに出て来る言葉それぞれの頭につけられて強調されています。「神の」同労者、「神の」畑、「神の」建物と。パウロもアポロも神の働きをともにする同労者です。大切なのは神です。それは神の働きです。彼らはあくまでそのための奉仕者です。またコリント人たちは「神の畑」です。神ご自身が心にかけて、耕している畑です。それは神のもので、神が実りをもたらそうとして働いておられます。そしてもう一つ、「神の建物」とも言われます。このイメージは次回の箇所を引き継がれます。ここでも大切なのは、これは神のものであるということです。コリント人たちはパウロやアポロなどの働き人たちについても、また自分たち自身についても、この信仰の視点からとらえ直さなければならないということです。コリント教会は単なる人間の集まり、また人間が主である場所ではなく、神が働いておられるところ、神が主であるところの者たちです。

私たちもこのみことばを自分たちに当てはめたいと思います。私たちも自分の目に見える人に注目しがちです。そして自分の好みに従って色々と論じ、優劣をつけ、その判断の正当性を巡って争い合うことはないでしょうか。それではただの人であり、御霊の人ではなく、肉の人であることを示すとパウロは言います。別な言い方をすれば、私たちは神の器を持ち上げ過ぎる誤りを犯さないようにするということでもあります。必要以上に高く上げて論争の材料にしないように！また自己主張の手段にしないように！ということです。むしろ私たちが常にまず思うべきは、神が様々な働き人を用いて働いておられるということです。目の前で具体的に神の道具として仕えてくださっている方々に私たちは感謝して良いのですが、それ以上に仰ぐべきは、神がその器を遣わして働いてくださっているということです。神はそのために色々な人を遣わします。決まった一つのタイプの人だけではありません。植える者、水を注ぐ者、他にも色々な働きがあります。それらを通して神の畑を豊かに実らせるべく神ご自身が働いてくださっています。私たちはこのことを思って神に感謝し、神が備え、遣わしてくださる様々な働き人・奉仕者を感謝して受け止め、それらを通して養ってくださる神に期待し、信頼して、さらに成長させて頂く者たちでありたいと思います。成長させてくださるのは神です。そしてもう一つ、このあとと言われて行きますが、私たちはこの働き人・奉仕者から自分を除外して、単に傍観的態度でいることはできません。私たち一人一人も神は用います。私たち一人一人も神の畑全体の祝福のため、神の建物全体の祝福のため、何らかの役割と使命が与えられています。私たちは神が自らに与えてくださっている使命に忠実に歩み、やがての日に「よくやった、良いしもべだ」と言われることにつながる歩みをささげたいと思います。そして私たちすべてを用いて豊かに実を結ばせてくださる神にすべての栄光と賛美を帰す歩みへ導かれて行きたいと思います。